

金沢市市街地の発展過程と新旧の地域構造

浦田 順子

1. 研究の目的

金沢市は、戦災に会っていない数少ない城下町の一つである。藩政時代は、前田氏の治世のもとに、加賀百万石の城下町として、独自の文化を形成し、繁栄を持続した。しかし、藩政時代に、江戸、大阪、京都に次ぐ人口を有していたのが、現在では、人口27位の中都市にすぎない。また、市域拡張率も、旧城下町の中で下から2番めであり、藩政時代からあまり変化していないように思われる。

本論文では、金沢市の市街地（DID地域とほぼ同義）をとりあげ、それが藩政時代からどのような過程をへて変化してきたかを考察するとともに、現在、金沢市市街地がどのような性格をもっているかを、産業構造から考察することを目的とする。

2. 要約

金沢市は、北陸の中枢管理機能をもつ、第3次産業のさかんな都市であるとともに、小規模ながら、多種類の工業が存在する都市である。金沢市の主要工業は、士族授産に端を発した、繊維工業及び、織機製造から始まった機械工業であるが、その他にも、伝統工業を始め、いろいろな工業がおこなわれている。

金沢市は、戦災に会わなかった旧城下町で、藩政時代はかなり大きな城下町であったため、市街地の発展の過程、地域構造に特色が見られる。

藩政時代は、城を中心に、東西南北でほぼ対称に武家屋敷、町屋、寺社が配置されていた。このように、町が四方に広がっている大都市は、当時、江戸と金沢しかなく、日本で第4位の人口を収容する大きな城下町であった。

藩政時代から、昭和40年までは、金沢市市街地は、あまり拡張されなかった。というのは、日本

海側の都市であるため、爆発的な人口増加もなく、広い武家屋敷の跡地をうめることで、人口を収容できたからである。工業による地域分化をみると繊維工業がおこった当初は、上級の武家屋敷跡にほぼ一様に工場が立地していた。しかし、鉄道の役割が大きくなると、金沢駅に近い、市街地西部の武家屋敷跡に工場が集中した。商業地域、住宅地域は、藩政時代のもを踏襲している。しかし戦後、旧市街地だけで人口を収容しきれなくなると、住宅地域の東進、南進が見られるようになり、それに伴って、近隣商業地域も東進、南進した。

昭和40年代に入ると、これまでの人口増加により、旧市街地だけでは、都市機能をはたせなくなった。そこで、金沢市長期計画をもとに、北陸本線以西の地域の開発が始まった。この計画は、旧市街地と新市街地を連結させ、旧市街地に中枢管理機能、第3次産業（卸売業は除く）を優越させ、なるべく歴史的景観の保存に努める一方、新市街地に、工業、卸売業を優越させようというものである。この計画により、工場及び問屋は、旧市街地から新市街地に移転するとともに、これ以上の東進、南進ができなくなった住宅地域も西進を始めた。こうして、工業地域、卸売業地域、住宅地域の存在する西部新市街地が形成され、金沢市市街地の面積も、昭和40年以前の2倍に拡大された。

最後に、産業構造、地域構造をもとに、金沢市の性格を考えてみたい。金沢市の中枢管理機能、商業を中心としながらも、工業の機能をもつという性格は、金沢城下町の性格と似ていると思う。そういう性格と、歴史的景観により、私には、金沢市は、昔とあまり変わっていないように思えるのである。